

高山の文化を高めた人々

75

初代坪内喜智老栄和三味線

三代目坪内喜智琅栄



初代喜智老栄(昭和41年)

祖父は九十歳を過ぎても、毎日山のように積み上げられた資料に埋もれた稽古場で、太棹三味線を抱えて黙々と譜起こしに精を出していました。譜起こしとは、まだ譜面になっていない曲を譜面に残す作業のことを言いますが、若い頃に耳にした民謡や自身が作曲した浪曲を後世に残そ

うと筆を走らせていました。本人曰く、

「全部譜面になった時は百五十歳やな」

民謡三味線流派「坪内流」の初代家元坪内喜智老栄(きちろうえい)、本名坪内吉郎は、大正七年に三福寺町の農家の長男として生まれま

した。斐太実業学校を卒業し、

農家として生活をする中、酒席で三味線に出会い、すぐにその音色と弾く様の虜になったそうです。その後、日中戦争のため満州に出兵しましたが、片時も三味線のことを忘れることは無かったと言



一本線譜

ます。復員後すぐに「米俵一俵」で三味線を買い、四六時中三味線を弾いていました。

ある日、NHKラジオののど自慢大会があり、町内の方の三味線伴奏として出場しました。カネは一つでしたが、それをきっかけに三味線の修行に出かけることを勝手に決め、妻と息子に農業を任せ(押しつけ)三味線と大きく重いテープレコーダーを背負って汽車に乗り、東京の津軽三味線の祖、木田林松栄先生に弟子入りするなど、全国の津軽三味線の師匠に手ほどきを受けに飛んで行きました。残された家族は本当に苦労したそうです。

四十八歳になった昭和四十一年、木田先生から坪内林松栄の名を授かり、指導者として帰郷した後は飛驒で初めての津軽三味線の教室を開くだけでなく、長女の光子を連れて汽車で岐阜市や美濃加茂市など県内各地へ赴き、三味線の伝承に努めました。

昭和四十五年、民謡会派「坪内流」を旗揚げ。初代家元となり名も坪内喜智老栄としました。それまでの三味線指導は師匠の演奏を目で見て

真似る事が主流の中で、坪内流は正確に多くの人が演奏できるように譜面に残すことを推奨しました。自身も「一本線譜」を考案し、稽古した後



三味線大会の大合奏(昭和54年)

も自分で効率的に稽古ができるよう、津軽三味線、飛驒の

晩年はこれまで任せきりだった山や畑仕事にも携わるようになり、家に帰れば「百五十歳」までかかるライフワークをこなしていました。平成二十八年に九十九年の生涯を終えるまで、多くの人に支えられながら実に幸せで有意義な生活を送ることができたのではないかと思います。



家族写真(昭和32年頃)